

## 所 功 著

### 皇位継承のあり方——「女性・母系天皇」は可能か

(PHP新書)

PHP研究所 2006



数年前から、「皇室典範」(昭和22年施行)に関する論議が、マスコミでも盛んにとりあげられている。それは、むしろ当然であろう。

なぜなら、現行の憲法も冒頭に「天皇」の章を設け、その第一条に「天皇は日本国の象徴(いわば代表)であり、日本国民統合の象徴(いわば中心)」と位置づける。のみならず、その第二条に「皇位は世襲のものであって、国会の議決した皇室典範の定めるところにより、これを継承する」と明示している。

それゆえ、この象徴世襲天皇制度を継続することは、われわれ日本国民が無関心でよいはずがない。そこで私も、国民の一人として、また法制文化史の一研究者として、その歴史的な在り方を調べると共に、近未来の在り方をも考えて、若干の論著を公刊してきた。その一つは『皇位継承』(文春新書、平成10年刊)、いま一つは『近現代の「女性天皇」論』(展転社、同13年刊)、もう一つが今回の新著にほかならない。構成は次の通りである。

- まえがき 有識者会議の成果
- 第1章 最近数年の「女性天皇」論議
  - 第2章 「皇室典範」と女帝問題の新論点
  - 第3章 皇位の男系継承史と女系容認論の検証
  - 第4章 皇位継承のあり方に関する管見
  - 第5章 女帝否認論と女系懐疑論の問題点
  - 第6章 女性宮家の創立と帝王学
  - 第7章 歴代の后妃と女帝の役割
  - 第8章 天皇陛下と皇太子殿下の御公務
- あとがき 皇室典範の段階的な改正論  
付1 皇室略系図(付、近代宮家)

このうち、第4章は昨年6月、政府の有識者会議で意見を述べた際(その速記録は首相官邸のホームページ掲載)、あらかじめ用意した論文である。その結論は、皇位継承者を男系男子に限定している現行の「皇室典範」には無理があることを直視して、いわば法的な規制緩和の改正を求めたにすぎない。

すなわち、近代的な一夫一婦制のもとで皇位の世襲を維持するには、必ず男子が生まれるとは限らないのだから、制度的に女性天皇も認め、その子孫=母系による継承も認めておく必要がある。

ちなみに、現在、皇太子(45歳)、秋篠宮(40歳)両殿下より若い次世代の男子皇族がおられない。今秋もし秋篠宮家に男子が誕生されても、決して安心できるわけではない。

ただ、その継承順位は、同等内(きょうだい・いとこ間)に男女の皇族がおられるならば、女子より男子を先行する(たとえば姉より弟を先とする)ことにしたほうがよいであろう。

なぜなら、天皇の公務は、皇族として生まれ育れた方であれば、男子でも女子でもできるにちがいないけれども、現実的には、結婚に伴い懐妊・出産・育児という大役の予想される女性よりも、男性の方がほとんど年中無休の超多忙な公務を原則終身にわたり担って頂きやすいと思われるからである。

また、現行の典範では禁止されているが、女性皇族も結婚のさい宮家を創立して皇室に留まることができるようしたり、後継者のない宮家が皇族を養子にとれるようすべきであろう。

なお、従来125代にわたり皇位が男系で続いてきたことは確かである。しかし、将来もし女系になったら皇統が断絶する、などという守旧派の主張は一種の思い込みであろう。一般の家庭でも、娘しかいなければ、他家から贅=婿(入天)を迎えることによって、その家系を継ぐ習慣があり、それで血統が途切れるとは誰も思わない。まして皇室の場合は、継承者に女性しかおられなければ、一般(旧宮家・旧華族を含む)から皇婿(皇配)を迎えて、その女性皇族が血統(皇統)と家職(皇位)を受け継ぎ当主となられる。従って、皇統譜の大統譜(歴代天皇系譜)は、その女性・母系天皇により続いていくことになる。

(ところ いさを 法学部教員)



三輪 卓己著  
ソフトウェア技術者の  
キャリア・ディベロップメント  
-成長プロセスの学習と行動-

中央経済社 2001



『ソフトウェア技術者のキャリア・ディベロップメント』は私の課程博士論文に若干の加筆・修正を行って出版したものです。私は社会人大学院で学び、主にキャリアや人的資源管理について研究しました。この本ははじめての単著であったのと同時に、経営コンサルタントとして忙しく働きながら寸暇を惜しんで研究した成果なので、とても思い入れがあります。もちろん研究そのものには反省点も多く、今後の課題がたくさんありますが、私個人のキャリアを振り返る上では非常に大切なトランジションであったといえるでしょう。

ソフトウェア技術者は知識・情報社会と呼ばれるこれからの社会において、とても重要な知識労働者です。ところが彼(彼女)らがどのように成長し、期待される成果を実現するのか、体系的に論じた研究があまりありませんでした。私は、実務の現場の緊急課題を解決したいという実務家としての思いと、将来性のあるテーマに挑みたいという研究的な思いの両方から、このテーマに取り組むことにしました。

最近キャリアという言葉がよく使われるようになりましたが、実はキャリア研究というのはとても学際的なもので、経営学だけでなく、労働経済学、社会学、心理学などの各領域で活発に研究がなされています。それだけ奥行きがあり、難しいテーマだともいえるでしょう。この本においても、ソフトウェア技術者の具体的な職務内容がどう変化するかといったキャリアの客観的側面と、彼(彼女)らがキャリアにおいて何を目指しているのかといったキャリアの主観的側面の両方が扱われています。そしてその二つがどのように関係し、仕事の成果につながるかが分析されています。

一方、ソフトウェア技術者というのなかなか複雑な存在です。彼(彼女)らには、最先端の技術を追求するといういかにも専門家的なところがある一方で、顧客や取引先、チームのメンバーと活発に相互作用しながら仕事を完遂するという管理的とも言

うべき側面があるのです。また、彼(彼女)らが仕事で使う知識も学際的で、自然科学に依拠するものだけでなく、社会科学的な知識もたくさん必要なのです。優秀なソフトウェア技術者とは多種多様な人たちの知的相互作用の中心となる人であり、それを通じて適切な問題解決を行う人なのです。

こうした特性を持つソフトウェア技術者のキャリアを分析してわかったことから、今後の社会を展望するためのヒントがいくつか得られました。これから研究を継続することで、さらに有益な示唆も得られるものと思われます。変化と多様性に満ちた新しい時代でどのように働き、どんなキャリアを歩みたいか、そうした問題意識を持っている学生諸君にぜひ読んでみてほしいと思います。なおこの本はタイトルのせい、本屋さんや図書館で間違えて情報産業や情報工学のコーナー、ひどいときにはプログラミングのコーナーなんかには置かれています。探すときはそちらのほうも見てみてください。

(みわ たくみ 経営学部教員)



カット 宮崎 良輔  
(外国語学部 3年次生)



# 川村 覚昭 ほか著 人間であること

上田閑照監修；皇紀夫[ほか]編集



燈影舎 2006

教育が人間形成の営みであることは、人間が誰しも思慮分別のない子どもから出発するという事実を見れば、疑う余地はない。それだけに子どもを教育するものは、常に「人間とは何か」を考え、自ら「本当の人間」「真の人間」になることが課題となるであろう。

今回、出版された『人間であること』は、そうした人間の根本問題を人間学と教育(哲)学の立場から明らかにしたものである。そこでまず本書の構成を紹介したい。

本書の全体は二部構成となっており、第一部の『人間であること その根底と諸相』は、「人間であること」(上田閑照)「苦悩の人間学的考察 フランクルの「ホモ・パティエンス」を手がかりにして」(山田邦男)「ナイチンゲールの積極的神秘主義と看護論における「三重の関心」 ケアの人間学の原点のために」(小林恭)「読むことについて 人間学的な一つの省察」(吉村文男)「笑いへの反省/笑いからの反省 「優越の理論」と関わらせつつ」(蔦野克己)「自己変革論 上田閑照『私とは何か』をめぐって」(林信弘)の六論文が、また、第二部の『人間であること その教育学的展開』は、「教育のなかの教育 臨床教育学の試み」(皇紀夫)「価値多様化時代における理性の責任 教育課題としての「対話の能力」」(徳永正直)「浄土の教育学 教育の構造と「私」の本質」(川村覚昭)「西田幾多郎と教育学 「教育学について」を読む」(宮野安治)「青年期における自己形成と道徳教育 批判的考察」(兼松義郎)「人生科」教育と身体 「キッチンと坐る」をめぐって」(松田高志)の六論文が、寄稿されている。

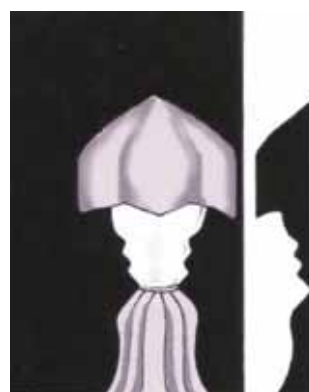
本書出版の動機は、監修者の上田閑照博士が、2003年に日本学士院会員になられたため、我々門下生が、各自の最新の研究成果を寄稿することでお祝いの気持を表すことになったからである。上田閑照先生は、紹介するまでもなく、現代日本を代表する最も著名な宗教哲学者の一人であり、本年6月26日には日本人で初めて「カール・ヤスパース賞

講義」という世界的に権威のある賞の荣誉に浴されている。この受賞は、単に一個人の喜びではなく、日本の哲学が世界的に認知されたことを示すものであり、西田幾多郎や田辺元に次ぐ独創的な哲学者が日本に誕生したことを意味する。従って、先生の監修のもとに編集された本書は、現代哲学の最先端の人間研究が含まれており、人間と教育に関心のあるものにとっては見逃すことのできない著作といえることができるであろう。

私は、そのなかでも、「浄土の教育学」というタイトルで人間形成の根本問題を論じた。私は、以前から近代教育学で忘却されてきた宗教的視点が人間形成の根底になければならないことを指摘しているが、本書では、そのことをより鮮明にするために、教育が成立する基本条件、つまり教育する人間と教育される人間との生きた向い合いに注目し、この「向い合い」の根本構造に人間の一切の問題の根源があることを明らかにした。

本書は、いずれにしても、『人間であること』を人間学的・教育学的関心から探究した論文集であり、現代の人間と教育の本質的・根本的問題に関心があり、それを哲学的に考えたい人に特に薦めたいと思う。

(かわむら かくしょう 文化学部教員)



カッタ 久世 さとみ  
(経済学部 1年次生)



大和 隆介 ほか著

英語教師のための  
「学習ストラテジー」ハンドブック

大学英語教育学会学習ストラテジー研究会編著

大修館書店 2006



朝、珈琲を飲みながら新聞のページを開いたり、夕方、食事の前に何気なくテレビのスイッチを入れたりすると、外国語学習の教材や英会話学校の勧誘が、私たちの目や耳に飛び込んできます。正確な調査が行なわれたわけではありませんが(そんなヒマな人はいない!?), こうしたCMはいっこうに減る気配がありません。少し考えてみると、これも無理のないことかもしれません。多くの人々が、今まで不幸にして巡り会っていないだけで、簡単に外国語をマスターさせてくれる夢のような教授法が、どこかに必ずあると信じているからです。しかし、現実には、そんな魔法のような教授法などどこにも存在しません。

「教師がいかなる指導をしても、全ての学習者に同様の効果をもたらすことはできない」という事実は、教育心理学においては常識です。クロンバックなどの研究者が、ほぼ半世紀前から、「学習効果は、教師の働きかけ(treatment)と学習者の適性(apptitude)との相互作用(interaction)によって決定される」ということを科学的方法で明らかにしているからです。外国語教育においても、やみくもに新しい教授法を考案する時代は終わり、現代は「脱メソッドの時代」と言われています。絶対的な存在として1つの教授法(メソッド)に頼ることなく、多様な教授法の長所を組み合わせ、置かれた環境の中で、個々の学習者の適性に合わせた指導をすることこそが最善だと分かってきたのです。

このように、言語教育において学習者個々の特性が重要視される中で、近年、学習ストラテジーの役割が大きな関心を集めてきましたが、日本の英語教育においては、学習ストラテジーを本格的に扱った書がほとんどありませんでした。こうした事情もあり、本書『英語教師のための「学習ストラテジー」ハンドブック』(大修館書店)は、昨年リーベル出版から出版された『言語学習と学習ストラテジー』と合わせ、多くの英語教員の方々から注目されています。

前書が、学習ストラテジーについて、その理論的な枠組みを解明・構築しようとする「基礎研究」とすれば、本書は、現場のニーズに応える多様な工夫や手立てを紹介する「臨床研究」と言えるものです。

優れた外国語学習者と未熟な学習者の最大の違いは、学習ストラテジーの使い方にあると言っても過言ではありません。本書は、言語学習の成果に大きな違いをもたらす個々の学習者要因について理解を深めると同時に、読者自身がどのような言語学習者であるかをふり返り整理するきっかけになることでしょう。優れた学習方法とは、決してレディー・メードではなく、自分に適した学習ストラテジーを見つけ出すことによって可能となります。自分自身のオーダー・メードの学習法を見つけることが出来た時、優れた学習者がまた一人誕生するわけです。一人でも多くの方が、本書を手に取り、優れた学習者になっていただければと願っています。

(やまと りゅうすけ 外国語学部教員)



カット

佐々木 諒(経営学部3年次生)